

「会員短信 33」

「句集名だけは決まっているが…」 小林英昭

会員短信を頼まれたが、書くことがない。そこでここでは、私がいま下腹に温めている「屁の句」について話したい。まずは例によって広辞苑を引く。

①飲み込んだ空気や、ガスが肛門から排出されるもの。おなら。ガス。②ねうちのなもの、つまらないものたどえ。「一の河童」「一理屈」。「屁でもない」「屁とも思わぬ」「屁にもならない」。

当然のことながら、言葉としてはあまりいい評価ではない。しかし、屁をテーマにした句はおのずと滑稽句になるだろうという安易な発想で詠み始めた。あと百句は欲しい。句集名だけは決まっている。

句集名は「いろはにほ屁句」。

とびらには、勝手に深沢七郎の言葉を拝借。「生まれることは屁と同じ」。

それでは、現在手持ちの句の一部を披露しよう。

初蝶に親の心配屁の河童

浮いてこい前と後ろに放り分けて

春寒し屁を差し戻す最高裁

亀鳴かすなど俳人は屁でもない

屁理屈をこねる憲法記念の日

炎昼や象の放屁の重低音

風死すの報せに右往左往の屁

することのなくて屁でもと放る夜長

屁を放れば連帯責任負ふ炬燵

存分に屁を放りにけり神無月

コロナウイルスがまだ世間を騒がせています。こちらを読む時は、くれぐれも換気にご注意を。